

関東第一が3年ぶり、堀越が29年ぶりの選手権出場へ 第99回全国高校サッカー選手権大会東京都大会 決勝

主催：(公財)東京都サッカー協会

日時：2020年11月14日(土)

会場：駒沢陸上競技場

新型コロナウイルス感染対策のため限られた部員とその保護者のみが見守るなか、「第99回全国高校サッカー選手権大会東京都大会 決勝」が11月14日に行われ、Aブロックは関東第一高校が3年ぶりの優勝、Bブロックは堀越高校が29年ぶりの優勝を果たした。



Aブロック決勝
関東第一 3-0 日大豊山

3	(前半)	0
0	(後半)	0



Bブロック決勝
堀越 2-1 大成

1	(前半)	0
1	(後半)	1

関東第一は自慢の2トップが爆発。 3年ぶり3度目の選手権へ

関東第一は前半、自慢の攻撃陣が爆発した。13分、中盤のハイボールをDF池田健人がヘディングで跳ね返すと、FW類家暁はディフェンスの前にうまく身体を入れて抜け出し最後はキーパーをしっかりと見て冷静に右足で決めた。さらにその3分後にはMF肥田野蓮治のアシストから最後はFW笠井佳祐が決めて追加点。「最初の本郷戦などで横からのクロスを外す機会が多くて、一度も入っていなかった。2点目の横からのクロスは自主練で練習してきたので、入って良かったと思っています」。課題としていたクロスからのシュートを沈め、大方の勝負を決めた。

今大会は笠井が5試合連続8得点、類家が5試合連続6得点と2トップが毎試合ゴールを重ねた。関東第一・小野貴裕監督は「今年は2トップで攻撃の良い形が引き出せていた。2人がまさか全試合で取ってくれるとは思ってなかったのですが、2人の力で牽引してくれたと思っています」と話した。

3年ぶり3度目の選手権へ。笠井は「チャンスが今大会を通してたくさんあって今日も外したシーンも2回ありましたし、そういう部分は全国に向けて練習からこだわってやっていかないといけない。もちろん目標は全国制覇ですけど、連続ゴールという部分でも毎試合取っていきたくて思っています」と意気込みを語った。全国のピッチでも得点を量産してチームを勝たせる。

全国出場はならずも初の決勝進出。 日大豊山はひとつひとつ積み重ねて来年以降の全国へ

日大豊山は3点ビハインドの後半、サイドの選手を生かしながらテンポ良くボールを回して相手押し込むシーンもあっただけに、海老根航監督は「前半からああいう形でできていたらもう少し面白い展開になっていたのかなと思います」と前半の戦いを悔いた。

初となる決勝では大舞台での経験値や両ゴール前での質の部分を感じた。それでも「それはここに来なければ感じられない部分。今後に繋がる決勝進出だったと思いますし、来年以降もこういう舞台で戦えるようなチームを継続して作っていくことが今後さらに上のステージで戦えるようになるための経験になってくると思う。ここまで来られたということはチームにとってすごく大きな意義があったと思います」とした。この経験は来年以降に引き継がれていく。



「一番苦労してきたキャプテン」。 堀越FW日野翔太が29年ぶり全国導く決勝点

勝負を決めたのは「一番苦労してきたキャプテン」だった。序盤から押し込む中で堀越は12分、右サイドからショートパスのコンビネーションで崩すと、MF古澤希竜のクロスに斜めに走り込んだMF山口輝星のトラップは伸びたが、こぼれ球をFW尾崎岳人が決めて先制した。しかし、後半は一転して大成ペースに。すると78分、セットプレーからついに同点ゴールを決められてしまった。それでもここで輝きを放ったのがキャプテンの日野翔太だ。「やっぱり最後はゴール前になきゃダメだと思った」とゴール前に「いる」ことを選択すると後半アディショナルタイム、堀越は狙いとっていたFW若松隼人に当たるとしを山口輝がラストパス。日野は落ちて右足ダイレクトで流し込んでこれが決勝点となった。

自主性を重んじる堀越では、キャプテンは全体を見ながらのチームの舵取りや戦術、交代も含めて様々な場面で決断をしなければいけない重責も背負う。今年はさらに新型コロナウイルスの影響でなかなか集まって時間を共有することができず難しい状況もあった。佐藤実監督は「例年のキャプテンと比べても本当に厳しい状態だったと思う。ただ逆に彼はそこを自身の強みにしてくれた」。「一番苦労してきたキャプテン」が堀越の歴史を動かした。

終盤までプラン通りも最後の失点に泣く。 自信を持てなかった選手たちが成長して決勝に

大成としては、前半1-0は「プラン通り」だった。後半は「残りの時間で2点取ってこられる」(豊島裕介監督)というプランニングでFW原輝斗、MF加藤慶八と攻撃のカードを投入。実際に78分にコーナーキックから原が同点弾をたたき込んだ。しかしアディショナルタイムに勝ち越し弾を奪われて敗戦。指揮官は「そこは我々の隙でもあるし、堀越高校さんの強さというのが最後出てしまったかなと思います」とした。

昨年初めてインターハイで全国大会に出場した大成だが、3年生が主体だったこともあり今年のチームはほとんどが全国を経験していない選手たちだった。そういった中で「彼らは経験値というものがすごく少なく、自信もなくて、やっぱり一個上の先輩たちには叶わないというのが、すごく彼らから最初に伝わってきたのが正直なところ」と豊島監督は言う。それでも「自分たちを見つめる力があつた」という代はりリーグ戦などでもものがき苦しみながらも一段ずつ階段を上りこのステージに。豊島監督は「すべては選手権だと、毎回の試合で言いながら選手たちもそれを信じてくれた」と選手の精神的な成長を語った。

